

琉球大学学術リポジトリ

与那国語における j と w の硬音化

メタデータ	言語: ja 出版者: 琉球大学国際地域創造学部国際言語文化プログラム 公開日: 2023-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 島袋, 盛世 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002019581

与那国語における j と w の硬音化

島袋 盛世

1. はじめに

本稿は与那国語に起こった $j > d$ 及び $w > b$ という二つの変化について考察を行う。これら二つの変化は全く異なる変化のように見えるが二つとも硬音化¹と呼ばれる変化に分類される。このような硬音化は語頭や音節の頭によく起こると言われている (Hooper 1976, Lavoie 2001)。

j 音が d 音へ変化する硬音化現象は与那国語独特の変化で、他の琉球諸語にはみられない。以下 (1) の徳之島方言 (奄美語)、与論方言 (国頭語)、首里方言 (沖縄語)、石垣方言 (八重山語)、多良間方言 (宮古語)、与那国語の語彙の比較から与那国語の語の頭にある d は他の琉球諸語の同源の語の j と対応することがわかる。これは $j > d$ の変化に起因する (平山・中本 1964、中本 1976、加治工 1980 など)。

(1) ²	徳之島	与論	首里	多良間	石垣	与那国
「山」	jama	jama	jama	jama	jama	dama
「湯」	ju:	ju:	ju:	ju:	ju:	du:
「夜」	juru	juru	juru	jul	ju:ri	duru

$j > d$ の変化が起こったのであれば、与那国語には j は存在しないのかということ、そうではない。語頭以外の環境では存在する。³ 以下の例からその存在が確認できる。

¹ 硬音化は fortition、strengthening、または hardening ともいう。これの逆の現象は lenition または weakening という。

² 本稿で提示する徳之島、与論、首里、多良間、石垣、与那国語の語例はそれぞれ、平山 (1986)、菊・高橋 (2005)、国立国語研究所 (1976)、下地 (2013)、宮城 (2003)、池間 (2003) に基づく。(2) 及び (7) にあげている語例についても同様。

³ j 音は語頭に全く現れないというわけでもない。人を呼ぶ際に発せられる [ja:] や [ja?] (あらっ) という表現などには存在する。また、[janagi] (植物のヤナギ) や [jakk'ara] (やり手、強者) などの内容語にも例外的にみられる。(池間 1998 参照)

(2)	徳之島	与論	首里	多良間	石垣	与那国
「親」	uja	uja	uja	uja	uja	uja
「眉」	maju	mi:maju	maju	maju	majo:	maju
「魚」	ju:	ju:	iju	izu	idzu	iju

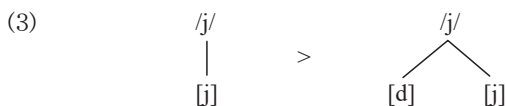
上述のような対応関係を基に与那国語では語頭においてjはdへ変化したという説明は説得力がある。

しかし、このj > dという変化は、jがdへ置き換わるという音素の変化ではなく、[j]が語頭において硬音化しその結果、[d]が/j/の異音として現れるようになったと考えられる。このjの硬音化現象については次の項において詳しく説明する。

wの硬音化現象については、語頭だけに止まらず、語中でも起こっているが、どのような過程を経て現在のかたちになったのか共時的及び通時的観点から分析を行い、その変遷過程を提示する。本稿最後の項では「硬音化の特徴」について考察する。

2. jの硬音化

上述したように与那国語のj > dという変化は音素j (/j/)が音素d (/d/)へ置き換わったのではなく、/j/が実現される音声に変化が起こった、つまり音素と異音の構造に変化が起こったと考えられる。この変化を簡潔に示すと以下ようになる。左が変化前、右側は現在の/j/とそれが実現される音声[j]と[d]との関係である。

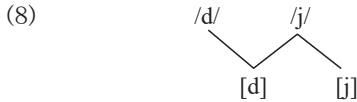


与那国語において/j/は[d]と[j]を異音に持ち、これらは以下のように相補分布をなしている。



音素jは語頭(#__)であれば[d]、それ以外の環境であれば[j]があらわれる。これが与那国語話者の脳の中にあるjについての言語知識である。この知識は無意識に機能している。例えば、与那国語で「家」を[da:]というが、この語は他の語の語尾に

[d]は /d/ の実現音声でもあるため、[d]は /j/ と /d/ 両方の音素の実現音であり、語頭においては neutralization という現象がみられる。この /j/ と /d/ の関係は以下のように示すことができる。



与那国語話者が [dama] (山) などの語頭子音を [d] と認識するのはこの構造に起因すると考えられる。

3. w の硬音化

与那国語では j の硬音化に加え、w にも硬音化が起り、PR⁶ *w > b という変化が起こった (平山・中本 1964, 中本 1976, 加治工 1980, Thorpe 1983)。PR *w に変化が起こらずそのまま w が保持されている今帰仁方言や那覇方言と比較するとその対応関係から変化があったことが分かる。以下に示す。

(9) ⁷	今帰仁	那覇	与那国
「若い」	waha:sen	wakasan	bagan
「夫」	wut'u:	wutu	but'u

j 音の場合とは異なり、与那国語の b (< *w) は語頭以外の環境でも現れることが以下の例が示している。⁸

(10)	今帰仁	那覇	与那国
「代わり」	kawai	kawai	kabai
「物忘れ」	munuwaŋi	munuwaŋi:	munubatŋi

⁶ PR は Proto Ryukyuan の略。琉球祖語という意。

⁷ 今帰仁方言は仲宗根 (1983)、那覇方言は内間・野原 (2006)、与那国語は池間 (2003) から抜粋。(10) 及び (13) についても同じ。

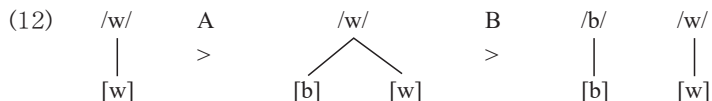
⁸ 語中においては、ka (皮)、kara (瓦)、a (粟) などのように、PR *w に対応する b が脱落している例もある。

これらの例に基づく、与那国語では $w > b$ という変化が起こったと結論づけることができる。しかし、与那国語には以下の例のように w 音を含む語も存在する。与那国語から w 音が消えてしまったわけではない。これはどう説明できるのだろうか。

- (11) (i) wa (豚) wa:di (上の方) wa:nai (嫉妬)
 (ii) kwan (固い) dwan (弱い) dwai (祝い) (池間 2003)

これらの語に w 音が存在する理由として考えられるのは、外的要因が関わるものと内的要因によるものの二つがある。前者であれば、(11) にあげた語は言語接触により与那国語に入ってきた借用語で、 $w > b$ の変化が起こった後に使われるようになったという説明になる。 $w > b$ の変化が起こった後に借用されたのであれば、 $w > b$ の影響を受けない。一方、後者であれば、 $w > b$ という変化が起こった時に (11) にあげられた語に含まれる w は変化の影響を受ける環境にはおかれていなかったため b へとは変化せず w は現在も保持されている、という説明になる。(11) にあげられた語彙は与那国語だけにみられるものではなく、琉球諸語で共通する。さらに、これらの語を構成する音声は琉球諸語間で規則的に対応するため ((13) (15) (16) 参照)、借用語説は可能性が低い。結論としては、もう一方の説が可能性としては高い。以下に $w > b$ が起こった環境を特定し、変化の影響を受けた語、受けなかった語の変遷過程を説明する。

与那国語の語彙において b や w があらわれる環境を詳しく分析してみると、 $w > b$ の変化の過程がみえてくる。この変化は体系内で無条件に起こった変化ではなく、条件の異なる2つの過程を経ている。まず1つは語頭に位置する w である。この位置にある w は硬音化を起こし ((12) の A)、 $[b]$ は $/w/$ の異音となる。その後、硬音化の現象は語中 (母音間) でも起こり、語頭以外の位置にある w も b へ変化した ((12) の B)。しかし、この変化の影響を受けずに w を保持している語もある。それが (11) にあげた語である。



j に起こったような語頭の硬音化 ((12) の A) が w 音にも起こった。 w 音の場合、 j 音の変遷と異なるのは、さらなる (12) の B の変化を経て現在の体系に至っているということである。この仮説が成り立つ理由を以下に説明する。

まず始めに、(11) の (i) にあげた wa (豚)、wa:di (上の方)、wa:nai (嫉妬) を

見てみよう。w > b の変化の影響を受けているのであれば、上の (9) や (10) にあげた語のように、wa, wa:di, wa:nai の語頭の w は b へと変化し、それぞれ ba, ba:di, ba:nai として存在するはずであるが、実際はそうではない。上で、今帰仁方言や那覇方言には w > b の変化が起こっていないと述べたが、w > b の変化が起こっていないければ、今帰仁方言や那覇方言でも当然「豚」「上の方」「嫉妬」を意味する語の語頭には w があるはずである。同源の語を並べ対応関係を確認しておこう。

(13)	今帰仁	那覇	与那国
	「豚」	?wa:	?wa: wa
	「上の方・うわべ」	?wa:bi	?wa:bi wa:di
	「嫉妬」	?wa:nai	?wa:nai wa:nai

(13) にあげた語の比較から、与那国語の語頭の w は今帰仁と那覇方言の ?w に対応していることがわかる。語頭子音の対応関係だけを抜き出して示すと (14) のようになる。

(14)	今帰仁		那覇		与那国
	?w	:	?w	:	w

(9) や (10) では、与那国語の b は今帰仁と那覇方言の w に、(13) であげた語例から与那国語の w は今帰仁と那覇方言の ?w に規則的に対応していることがわかる。前者の w : w : b と、後者の ?w : ?w : w の対応関係は明らかに異なる。

まず「豚」を表す語についてだが、この語の琉球祖語形を Thorpe (1983) は *Uwa と再建している。多くの琉球諸語・方言において、この語と同源の語は今帰仁方言や那覇方言のように 1 音節であるが、奄美や与論の方言、八重山の方言では 2 音節の語形もみられる。例えば、以下にあげた志戸桶方言、与論島方言、西表方言、波照間方言ではそれぞれ uwa:, uwa:, uwa, uwa である。これらの語においては、他の琉球諸語で失われた語頭の母音を保持していると考えられる。

(15) ⁹	志戸桶	与論島	西表	波照間
	「豚」	uwa:	uwa: ¹⁰	uwa
			uwa	uwa

「上の方」「嫉妬」の古い形はどうだろうか。今帰仁と那覇方言の ?wa:bi、そして与那国語の wa:di は日本語の「うわべ」と同源で、今帰仁、那覇、与那国では語頭の母音を失った形だと推測できる。

「嫉妬」を表す語については、今帰仁と那覇で ?wa:nai、与那国では wa:nai であるが、これらは日本語古語の「うはなり」（上代語辞典編集委員会 1967、大野・他 2008）と同源であると考えられている（仲宗根 1983、国立国語研究所 1976）。?wa:nai 及び wa:nai は変化の過程で語頭の母音を失った形である。

言語の変遷において母音や子音、または音節が脱落するという現象は多くの言語でみられる。音声脱落し消えてしまう場合に、痕跡を残さず跡形もなく消える場合と、かつてそこには音声があったという痕跡が残る場合がある。琉球諸語にもこの両者の変化がみられる。与那国語の wa（豚）、wa:di（上の方）、wa:nai（嫉妬）は前者の例で、今帰仁や那覇方言の ?wa:（豚）、?wa:bi（上の方）、?wa:nai（嫉妬）は後者の例である。これらの語の語頭に存在していた音声脱落した際、今帰仁や那覇方言では後続する w に声門破裂音化が起こっている。このような現象は琉球諸語に広くみられる。例えば、首里方言で「人」は ?tʃu というが、これは PR *pito の第 1 音節が落ちた形で、語頭の子音に声門破裂音化が起こっている。

今帰仁方言や那覇方言の ?w は語頭に存在していた音声脱落したという痕跡である。これをもとに、今帰仁と那覇の ?w に対応する与那国の wa（豚）、wa:di（上の方）、wa:nai（嫉妬）などの語の w は以前、「語中」（母音間）に位置していたという結論を導くことができる。

与那国語において「語頭 w の硬音化」が起こった時、上で説明したように、wa（豚）、wa:di（上の方）、wa:nai（嫉妬）などの語の語頭には母音があった。つまり、これらの語の w は語の頭に位置してはおらず、そのためこの w には硬音化が起こらなかった。「語頭 w の硬音化」の後、語頭の母音が脱落したため、第 2 音節の頭にあった w が語頭にくるといふ現在の形になった。その後、この硬音化現象は語頭以外にある w へも影響を及ぼし語中でも w > b の変化が起こった。kabai（代わり）や munubatʃi（物忘れ）などはその例である。しかし、wa（豚）などの語は「語中 w の硬音化」の影響も受けていない。これは、「語中 w の硬音化」が起こったとき、wa（豚）は既に語頭の母

⁹ 志戸桶方言、西表方言、波照間方言は平山・他（1966、1967）から、与論島方言は山田（1995）から抜粋。

¹⁰ 菊・高橋（2005）には ?wa: とある。

音を失っていたため、この語の w 音は「語中」ではなく「語頭」にあったためである。

語頭の母音が脱落するという現象が起こったため、「語頭 w の硬音化」や「語中 w の硬音化」の影響を受けていない語は wa (豚)、wa:di (上の方)、wa:nai (嫉妬) などのような語以外にもある。(11) の (ii) にあげた kwan (固い) や dwan (弱い) そして dwai (祝い) などのように Cw- で始まる語も w を含んでいる。これらの語は Cw- < *CVw- の変化を経て現在の形になったと考えられている (Thorpe 1983)。この変化が起こっていない、例えば首里方言と比較すると変化があった言語と変化が起こらなかった言語の違いがわかる。琉球祖語形も含め以下に語例をあげる。

(16)	首里	与那国	琉球祖語 ¹¹	
	「固い」	kuɸsan	kwan	*kowa- ~ *koQpa-
	「弱い」	jaɸarasan ¹²	dwan	*jUwa-
	「祝い」	ju:we:	dwai	

kwan (固い) や dwan (弱い) などとも wa (豚) の場合と同様に、与那国語に「語頭 w の硬音化」が起こったとき、kwan と dwan は *kuwan や *duwan のような形であったため、w は語頭にはなく、影響は受けていない。その後、w の直前の母音が脱落し kwan や dwan へ変化したため、「語中 w の硬音化」が起こったとき、これらの語は影響を受けなかった。

上の (9) (10) (11) にあげた語がどのように変化したのかを「語頭 w の硬音化」(#w- の硬音化)、w 音の直前の音節核の脱落 (V(w)- の脱落)、「語中 w の硬音化」(-VwV- の硬音化) を変化の起こった順に並べて示すと以下ようになる。

(17)	#w- の硬音化	V(w)- の脱落	-VwV- の硬音化	現在
*wagan	>	bagan		bagan (若い)
*kawai			>	kabai (代わり)
*uwa		>	wa	wa (豚)
*kuwa		>	kwa	kwa (固い)

w 音の硬音化が上で示したような変遷を経ていると仮定すれば、wa (豚) や kwa (固い)

¹¹ 本稿で提示する琉球祖語形は Thorpe (1983) から抜粋。

¹² jaɸarasan は「体が弱い」という意味で使われる (国立国語研究所 1976)。

など (11) にあげられているような語の存在は容易に説明できる。

4. 硬音化の特徴

硬音化という現象は多くの言語でみられ決して珍しい現象ではない。この項では硬音化が起こる環境などを含めその特徴について考察する。まず始めに硬音化とは何か。どういう現象だと捉えられているのかみてみよう。

Donegan (1993) は、硬音化は個々の分節音の特徴を最も効果的にする異化的現象で、これは、一連の分節音の繋がりを最適化する軟音化と逆の現象である、と述べている。しかし、硬音化には直前や直後の音声への同化によって硬音化が起こる場合もある。例えば、ソト語では摩擦音が鼻音の直後にくると破裂音へ変化する。Harris and Lindsey (1995:73) は以下の例をあげ、fa の f が m の直後に来る場合、m への同化が起こり p^h へと変化していると説明している。

- (18) fa ‘give’
m-p^hε ‘give me’

子音自体は硬音化してはいるが、直前の音声 m が持つ「破裂性」という特徴に f 音が同化して起こっており、Harris and Lindsey もはっきり「同化」が起こっていると述べている。このような同化による硬音化は珍しくなくブクス語やマトウンビ語などでも鼻音の直後で硬音化が見られる (Odden 2013)。これは Donegan の定義では軟音化にあたる。与那国語で起こっている硬音化はこのような同化によるものではない。

硬音化とその逆の現象である軟音化は相対的な音声のきこえ度 (sonority) と関わりがあるとの指摘もある (Crowley and Bower 2010, etc.)。音声をきこえ度の高い順に上から順に並べると以下ようになる。きこえ度が一番高いのが vowels で一番低いのが voiceless stops である。硬音化はきこえ度の高い音声から低い音声へ変化し、軟音化はその逆であるという分析である。

- (19) vowels
glides
liquids
nasals
voiced fricatives
voiceless fricatives
voiced stops
voiceless stops

(Crystal 2008 参照)

硬音化が起こる環境については、Hooper (1976) や Lavoie (2001) は硬音化が最もよくみられるのは語頭であるという。また、音節や韻律、または語や句などの頭で起こる硬音化は、聞き手にとってこれらの単位の境界を区別するための有益性に関係しているとの考察もあり (Fougeron and Keating 1997)、Johnson and Reimers (2010:58) はスペイン語で、yerno [jerno] (娘の夫) が [ʒerno] や [dʒerno] と発音される例をあげ、語頭などで [j] が [ʒ] または、[dʒ] へ硬音化することにより¹³、聞こえやすくなると指摘している。

きこえ度と音節の構造は相関関係にあり、音節を構成する音声は音節の外側から音節の核にかけてきこえ度が増すと言われている (Malmberg 1963, Hooper 1972 and 1976; Lass 1984, etc.)。この観点から考えると、音節の頭にある音声がきこえ度の低い音声へ変化するという現象は不自然ではない。

語頭の硬音化について、インド・ヨーロッパ語族にみられる硬音化及び軟音化現象の分析を元に、Hock (1992) は語頭における硬音化現象の特徴を捉えようと試みている。分析の結果、以下の三点が重要だと指摘する。¹⁴

- (20) (i) 語頭の硬音化は語中において阻害音の軟音化が起こっている言語に限られる。
(ii) 語頭の硬音化は鳴音に限られる。
(iii) 語中において鳴音の軟音化が起こっていると、語頭において同鳴音の硬音化は起こらない。
Hock (1992:109)¹⁵

これらの指摘点は与那国語の硬音化現象の特徴も的確にとらえられているのだろうか。確認してみよう。

(20) の (i) ~ (iii) について、与那国語において確認すべきことを項目別に挙げると、(i) については、語中で阻害音の軟音化が起こっているか、(ii) では、語頭において硬音化が起こっている子音は鳴音だけであるか、(iii) に関しては、語中において同鳴音の軟音化が起こっていないか、の三点である。

まず始めに (i) の語中における阻害音の軟音化であるが、与那国語では PR -*k- >

¹³ Lipski (1994) は南米で話されているスペイン語の多くの方言において、語頭の j の硬音化がみられると述べている。

¹⁴ Hock (1991) の Initial strengthening についての記述も参照されたい。

¹⁵ 原文は次のとおり。 “This view considers most important the following: (i) Initial strengthening is restricted to languages with medial obstruent weakening. (ii) Initial strengthening is limited to sonorants. (iii) Initial sonorants do not strengthen if their medial counterparts are weakened.” (Hock 1992:109)

-g- (例. *kokoro > kuguru 「心」) や PR -*g- > -ŋ- (例. *kagami > kaŋan 「鏡」) などの変化がみられる。従って、(20) の (i) は与那国語の硬音化現象にも当てはまる。(ii) についてだが、与那国語では語頭において PR *z > d (例. *zu(wo) > du: 「しっぼ」) など、鳴音以外の子音の硬音化も起こっている。従って (ii) は与那国語の硬音化現象の特徴を捉えているとはいえない。(iii) については、Hock の指摘が言語における硬音化の一般的特徴を捉えているのであれば、与那国語における j や w は語中で軟音化を起こしている例はないということになる。まず、j や w が軟音化するとはどういうことかを確認しておきたい。Kirchner (2001:3) によると、軟音化とは無声子音の有声化や破裂音の摩擦化、障害音の接近音化など子音に起こる変化で、子音の脱落も軟音化現象と述べている。また、Hock (1991) は軟音化現象を有声・無声及び聞こえ度という特徴に基づき軟音化現象を階層化して示している。¹⁶それによると、j などの鳴音の軟音化は脱落である。

与那国語において j 及び w は語中で脱落せずに保持されているかどうか確認してみる。まず、j をみてみると、以下にあげた例から分かるように語中の j は基本的に脱落することなく保持されている。

(21)	与那国語	PR
	hajan (早い)	< *paja-
	minumaju (眉)	< *majU
	iju (魚)	< *ijU
	uja (親)	< *Uja
	kjan (かゆい)	< *kajU-

語中の w については j と異なり、以下の語例が示すように、保持されている例や失われた例もある。上述したように、w は語中でも硬音化が起こっており、失われずに b (< *w) が保持されている場合もある。

(22)	与那国語	PR
	kwan ~ kwa:nu (固い)	< *kowa- ~ *koQpa-
	wa (豚)	< *Uwa
	dwan (弱い)	< *jUwa-
	ka (皮、井戸)	< *kawa
	umui (思い)	< *Umowi
	kui (声)	< *ko(w)e

¹⁶ The weakening hierarchy (Hock 1991:83) という図も参照されたい。

これらのことから、(20) の (iii) で提示されている内容は与那国語で見られる硬音化現象を捉える内容ではないことがわかる。語頭子音の硬音化の特徴を捉え一般化するという観点に立つと、与那国語でみられる現象も考慮に入れ分析する必要がある。言語に広くみられる硬音化現象だが、特徴を的確に捉えるには、多くの言語の分析が待たれる。

5. まとめ

本稿では与那国語に起こった $j > d$ 及び $w > b$ の変化について考察を行った。これら二つの変化は硬音化と呼ばれ、言語一般に音節の頭や語頭によくみられる現象である。与那国語において j と w のあらわれる環境の分析から、これら二つの音声の硬音化について、 $j > d$ 及び $w > b$ は両方とも語頭から変化が始まったことが明らかになった。 $j > d$ は語頭だけにとどまった。この変化は j が d へ置き換わるという音素の変化ではなく、 j が語頭において硬音化しその結果、 $[d]$ が $/j/$ の異音として現れるようになったということである。一方で、 $w > b$ は語中へと広がり、最終的には音韻の変化となった。

また、硬音化の特徴や起こりやすい環境などに関する先学の指摘及び、他の言語でこれまで観察された例や研究結果を提示し、与那国語の硬音化現象と比較し考察を行った。

参考文献

- Crowley, Terry and Claire Bowern (2010) *An Introduction to Historical Linguistics*, 4th ed. Oxford University Press.
- Crystal, David (2008) *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*, sixth edition. Blackwell Publishing.
- Donegan, Patricia (1993) On the phonetic basis of phonological change. *Historical Linguistics: Problems and Perspectives*, 98-130. London and New York: Longman.
- Fougeron Cécile and Patricia A. Keating (1997) Articulatory strengthening at edges of prosodic domains. *Journal of Acoustic Society of America*. 101 (6): 3728-3740.
- Harris, John and Geoff Lindsey (1995) The elements of phonological representation. *Frontiers of Phonology: Atoms, Structures, Derivations*, 34-79. London and New York: Longman.
- 平山輝男 (1986) 『奄美方言基礎語彙の研究』東京：角川書店。
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1966) 『琉球方言の総合的研究』東京：明治書院。
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』東京：明治書院。
- 平山輝男・中本正智 (1964) 『琉球与那国方言の研究』東京：東京堂。

- Hock, Hans Henrich (1991) *Principles of Historical Linguistics, Second revised and updated edition*. Mouton de Gruyter.
- Hock, Hans Henrich (1992) Initial Strengthening. *Phonologica 1988 – Proceedings of the 6th International Phonology Meeting*, 102-110. Cambridge University Press.
- Hooper, Joan B (1972) The Syllable in Phonological Theory. *Language* 48-3: 525-540.
- Hooper, Joan B (1976) *An Introduction to Natural Generative Phonology*. Academic Press.
- 池間菊 (1998) 『与那国ことば辞典』 与那国.
- 池間菊 (2003) 『与那国語辞典』 与那国.
- 上代語辞典編集委員会 (1967) 『時代別国語大辞典 上代編』 東京：三省堂.
- Johnson, Wyn and Paula Reimers (2010) *Patterns in Child Phonology*. Edinburgh University Press.
- 加治工真市 (1980) 「与那国方言の史的研究」 黒潮文化の会 (編) 『黒潮の民族・文化・言語』 491-516. 東京：角川書店.
- 菊千代・高橋俊三 (2005) 『与論方言辞典』 東京：武蔵野書院.
- Kirchner, Robert (2001) *An Effort Based Approach to Consonant Lenition*. London and New York: Routledge.
- 国立国語研究所 (編) (1976) 『沖繩語辞典』 五刷発行. 東京：大蔵省印刷局.
- Lass, Roger (1984) *Phonology: An Introduction to basic concepts*. Cambridge University Press.
- Lavoie, Lisa M (2001) *Consonant Strength – Phonological Patterns and Phonetic Manifestations*. New York and London: Routledge.
- Lipski, John M (1994) *Latin American Spanish*. London and New York: Longman.
- Malmberg, Bertil (1963) *Phonetics*. New York: Dover Publications.
- 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』 沖縄：沖縄タイムス社.
- 中本正智 (1976) 『琉球方言音韻の研究』 東京：法政大学出版局.
- 仲宗根政善 (1983) 『沖繩今帰仁方言辞典』 東京：角川書店.
- Odden, David (2013) *Introducing Phonology – Second Edition*. Cambridge University Press.
- 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎 (2008) 『岩波古語辞典』 補訂版. 東京：岩波書店.
- 琉球大学沖縄文化研究所 (編) (1968) 『宮古諸島 学術調査研究報告 (言語・文学編)』 沖縄：琉球大学沖縄文化研究所.
- 下地賀代子 (2013) 『つかえるたらまふつ辞典—多良間方言基礎語彙』 沖縄：多良間村教育委員会.
- Thorpe, Maner L (1983) *Ryukyuan Language History*. Unpublished doctoral

dissertation, University of Southern California.

内間直仁・野原三義（2006）『沖縄語辞典 那覇方言を中心に』東京：研究社。
山田實（1995）『与論島語辞典』東京：おうふう。

Abstract

Fortition of *j* and *w* in Yonaguni

Moriyo Shimabukuro

This paper investigates the changes $j > d$ and $w > b$ occurred in the language of Yonaguni. The changes are called fortition.

It has been widely known that the sound ‘j’ changed to the sound ‘d’ word-initially in Yonaguni, as the following example demonstrates:

	Tokunoshima	Yoron	Shuri	Tarama	Ishigaki	Yonaguni
‘mountain’	jama	jama	jama	jama	jama	dama
‘parent(s)’	uja	uja	uja	uja	uja	uja

The change from ‘j’ to ‘d’ has been considered a phonemic change, but in fact it is allophonic. The word *t’ujuru* ‘one night’ is composed of *t’u(tfi)* ‘one’ and *duru* ‘night’. This example shows that [d] is underlyingly /j/ - [d] is realized when it occurs word-initially.

Regarding the change $w > b$, it became phonemic through an allophonic stage, as shown below.



This paper claims that both ‘j’ and ‘w’ became strengthened word-initially, and later the change $w > b$ occurred word-internally (Change B above), which did not occur to ‘j’. By pointing out the fact that there are words with ‘w’ in them, the paper explains why those words did not undergo the change.

The paper also discusses characteristics of the phenomenon of fortition including possible reasons why it occurs and conditions in which it occurs.